

一九七七年一月二〇日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社 発行人 滝野 忠

東京都渋谷区本町六丁目二八の二コーポ幡ヶ谷九〇四 電話(03)337714649 FAX(03)329915367
振替 〇〇一〇〇一九一五八四三二 券金 東京券金本店 No.1154163

購読料 月額 600円 6ヵ月前納制

〈もくじ〉

■巻頭言

「反独占」「リベラリズム反対」が労働運動の進路(一)……………2
大衆運動のなかで「新社会党」建設を 上野 建一……………3

——「新社会」週刊紙の役割は大きい——
人権切り捨て、大量失業の時代へ 坂牛 哲郎……………5

——さし迫る一大攻撃に対応して(二)——
まず自己変革にとりくむ 赤穂 播……………9

——何が問われているのか——
やった!「日刊乗務」七千号達成 大嶋 甲三……………13

——一九七六年の創刊以来、たたかいの武器に——
読者からのおたより……………15 編集部だより……………16

「新社会党」結党大会のご案内……………16

◇残部僅少 上野建一著 社会通信刊◇
政界再編後を読む——護憲の旗を掲げて

四六判上製、二百頁、千五百円(千三百十円)

旬刊 社会通信

NO. 628

一九九六年二月二日号

一九九六年二月二日発行
(毎月一日・二日・二日三回発行)

■ 巻頭言 ■

「反独占」、「リベリズム反対」が労働運動の進路

「独占資本主義反対」（反独占）の主張が労働運動組合の運動方針から消えて久しい。資本主義、労働者という言葉すら、労働者階級の陣営から投げ棄てられてしまった。独占資本のイデオロギーは健全なのに、労働者階級のイデオロギーは、連合発足とともに融解した。眼前にくり拡げられる様相は、資本の論理であり、まさにムキダシの資本主義そのものであるにもかかわらず。

資本の論理は、「搾取、剰余価値」の論理である。労働力の価格をいかに安くするか、資本の攻撃はここに集中する。景気はよくなるか。もし六十年代の高度成長、八十年代のバブル景気を想いなつかしむとすれば、絶対に景気はよくなる。だから、資本はたとえ売り上げ高が減っても、儲けが増える仕組みをつくることに血道を上げる。

日本独占資本は円高、空洞化の大宣伝の中、東南アジア全域を再生産構造に組み込んだシフトをほぼ完了した。自動車産業に例をとれば、一九九七年、国内生産の比率はほぼ四対六となる。ちなみに、ジェットロの資料からドルベースの月額賃金を日本比で示せば、シンガポール五分の一、タイ二〇分の一、マレーシア一五分の一、インドネシア三〇分の一、フィリピン二〇分の一、中国五〇分の一となる。さらに土地価格は四〇分の一から五〇分の一で、電力価格は二分の一から四分の一である。大企業はむろん中小企業が海外に工場を移すのは「資本の論理」の命ずるところだ。

昨今の音楽界の状況は、ベートーベンは不人気でモーツアルトばかりだという。気力充実、社会変革の時期来るといふ情勢にはまだないようだ。今村仁司氏のいう「群衆—モンスター—の誕生」（ちくま新書）の状況にはもう少し時間が必要に思われる。しかし、九七年四月にむけ、「モンスター—の誕生」は秒読みの段階に入ったといっているだろう。

今年の日経連の「労働問題研究委員会報告—構造改革によるダイナミックな日本経済の実現に向けて」のポイントには「第四章今春季労使交渉のありかた—合理的な賃金決定をめざして」の（三）の2「個別企業の支払い能力による賃金決定」で、ポイントは（一）課題と問題をすべて個別企業の責任に集中し、（二）世間相場追従の「横並び」賃金決定の見直ししたがって（三）春闘方式全面否定を掲げたことである。その要点は次のとおり—

「今日の経済・経営状況下では、支払い能力に余力があれば、まず雇用の維持を優先し、その次に賞与・一時金に生産性向上の成果を振り分ける。もちろん、これからの賞与・一時金については、業績に応じた原資の決定と成果に基づく個人配分を徹底。生産性の向上が見込めない場合は、ベース・アップは論外。仮に昇給制度の運用によって原資増を招く場合には、賃金体系の見直しが迫られる事態も生じうる。

初任給についても据え置かざるを得ない。忘れてはならないのは、賃金決定に際しては、賞与・退職金・社会保障関連負担、労働時間などを含めて、総額人件費管理の視点から総合的な考慮を必要がある。

高齢化の進行によって、今度は賃金以外の社会保障関連コストの増加は不可避であるし、とくに、労働時間の短縮は人件費コストの上昇をもたらす。」

現代は資本主義がもっとも「純化」した時代。「反独占」が住専問題にもみられるように、だれの眼にも明らかな時代である。

（滝野 忠・続）

大衆運動のなかでの「新社会党」建設を

——「新社会」週刊紙の役割は大きい——

久保蔵相で自民の肩代わり 波瀾万丈といえそうな予算国会が開幕され、早くも橋本首相は「住専」問題と関連して、蔵相当時の責任を追及され議員辞職を求められた(一月二十五日・旧公明の大久保直彦参院議員から)。住専問題は明らかに自民単独政権下の悪業・悪政の処理であって、本来ならば社民党(旧社会党)が先頭に立ってきびしく追及し内閣総辞職か国会解散に追い込むべきであったのだが、自民政権の一分派的存在になって政権にすがりついている現状では、自民党と一緒にあって責任を追及される逆の立場になっている。支持者にとってはこんな情けない話はないと思う。

住専処理の最終案では、二次損失分の支出を含めると国の支出額は一兆円を超すことになりそうだという。具体的には保守・財界勢力の維持のための施策に何故社民党は協力するのか。この事実は社民党が第三保守党になった何よりの証拠であろう。細川内閣で山花前委員長と佐藤社民党幹事長がそれぞれ担当大臣となって、小選挙区制を推進し実現したように、今度は「住専」「消費税引上げ」の担当大臣が旧社会党の書記長だった久保且大蔵大臣(現社民副党首)だから二度までも自民政治に協力して、勤労国民、ことに護憲派への公約を裏切ることになったわけである。

連立政権に加わった革新政(勤労者党)の本来の任務は、勤労大衆のもっとも切実な要求に応えることである。もちろん共に連立に参加している他党との関係もあって確実に実行することができる幾つかの政策にしばらくのええいが、自党の公約、基本政策に反してはならない。勤労国民大衆の多くは、最初から党の綱領や理念に賛成して党を支持するのではなく、この党が具体的に現実的に「切実な要求」に応えてくれたときにこの党を支持するのである。「このとうり現実に諸君(勤労大衆＝筆者)の生活をこれだけ良くしてくれた」ということを、彼等の体験に訴えて立証する―いちど立証するばかりでなく、なんどもこれを積み重ねる―必要がある(山川均)。しかし旧社会党と現社民党の連立内閣における対処の仕方は完全に失敗している。

村山内閣はたしかに水俣病問題をはじめいくつかの課題を解決したが、しかしその何倍もの施策で勤労大衆を失望させ、支持者を離反させている。そのうえ旧社会党を保守党化させ、党組織そのものに分散や分裂を起こさせている。皮肉なことに、先日社民党の初代幹事長になった佐藤観樹代議員が住専問題で、融資残高七十四億円をもつ「東海電工」の監査役を永い間務めていて報酬を得ていることがバクロされ、党内でもかつての右派同志(左近代議士など)から批判されている。社民党の幹事長(書記長といわないことも保守党化の一つか)が疑惑をもたれていることや、リベラル新党の党首に擬されている横路前北海道知事が官々接待や裏金づくりの疑いで告訴されていることなど、新たなリベラル新党づくりに暗雲がたれ込め始めたといえよう。この党に展望はない。

新社会党建設の課題 「新社会党」の党建設にとって重要なことは、大衆運動、市民運動などと結合または協同のたたいのなかでの組織づくりであるということである。三月三日の結成全国大会まで旧社会党との関係、自らの組織再編などの必要から、どうしても、新社会党結成のために内向きの言動になりがちであるが、勤労大衆の求める切実な課題は山積している。旧社会党が曲がりなりにも果たしてきた反保守の役割りと任務を、旧社会

党が消えたいま、新社会党の果たす大衆運動や市民運動での任務は大きく重い。春闘、安保・沖繩問題、反消費税、反合理化・失業対策、住専・赤字国債問題などがそれである。自治体闘争もきわめて重大。これらの課題と新社会党は結成準備の段階から真剣に取組むことである。旧社会党を批判してきたことを新社会党はさらに実践のなかで、われわれからこうするという事を明らかにすることである。

機関紙「新社会」を武器に、そしてこれらの諸運動、活動のなかでの「週刊・新社会」機関紙の役割は一段と重要である。常に問題点を明確にして宣伝し、大衆の不満と不平を受け取り、実践を豊かなものにしなければならぬ。新社会党の政治方針をいつもはつきりとさせ、わかり易い解説、論評によって政治的指導性をもつことである。庶民の眼から見た現実がいつも紙面に溢れていなければならぬ。勤労国民の生活と希望を代表する新聞をつくり出せるかどうか、新社会党の建設を成功させるかどうかの別れ道になろう。

「新社会」新聞を成功させるためには、分局活動が何よりも大切になる。一人一人の黨員・支持者が数部を手配りする体制、これを網の目のように広がるよう組織活動をしなればならない。総分局や県総局などのオルグ体制の確立が求められる。

言行一致で仲間を広げ、ねばり強く、しかも課題には体当たりで展望を切り開いて行くことである。

旧社会党の長所・成果を發展させ、欠陥は大胆に切り捨てる政治姿勢の確立を急ぐことが必要である。このことを本部から明確にしなければならぬが、同時に県本部、総支部段階の党づくりのなかで県民・市民大衆のなかに強く打出されなければならない。重ねて強調するならば、新社会党は旧社会党の再建という大きな課題を負ってはいるが、旧社会党の再建という意味の大きな部分は、欠陥を新社会党に持続しないことである。

当面のいくつかの課題 「新社会党」の党づくりのなかで、当面常に頭において活動することを項目としてあげるならば次のようになるのではないだろうか（もちろん仲間との日常的な意思統一、そのための状況の調査・分析と学習、討論を前提にしてである）。

(A) 出発は常に少数からである場合が多いので他への安易な依存に走りがちである（例えば労組幹部、議員への）。しかし自前の党組織を仲間が力を合わせてつくり出すという強い主体性の確立が重要である。

(B) 最初から大きなことは望めないが、社会の改革めざして、当面の改良のために日常活動を積極的に行えるようにすること。黨員と支持者の活動条件をいねいに話し合い、役割分担によって有効的に活動できる。

(C) 旧社会党の最大の欠陥の一つは、「議員党的体質」であった。本部をはじめ各級機関は各級議員の独占的支配といえる状態であった。今度の社民党の組織は一層ひどいものになっている。それによって旧社会党は、保守化し、政党にとって重要な政治・社会改革の路線を捨て、退廃したのであった。新社会党にとって議員は勤労大衆の「代理人」であって、任務は大きくともいっさいの党内特権は有しないのである。党内民主主義による諸決定、役員は選挙によることは党是でなければならない。

(D) 労働運動をはじめとする大衆運動の先頭に立つ政党であることを忘れてはならない。勤労大衆にとって政治も経済も反動性を強めている。いよいよ生活と権利、平和と民主主義を守るためには反自民・反大企業の大衆的運動とたたかいが重要である。そのことに役に立つ党でなければ、国民の信頼と支持はえられない。そのために全力をあげようではないか。

人権切り捨て、大量失業の時代へ

——さし迫る一大攻撃に対応して(二)——

民間大企業組合を破壊した能力主義管理

正社員、本工を減らし、臨時職員、短期契約の専門職員への切りかえは、八十年代、M E合理化の進展に即応し、民間大企業職場では、既に実施に移されている。いまこれを、第三次産業、中小企業にも徹底させ、剰余労働者と称する二十万人を切り捨てるといふことなのである。

その具体的展開は、抵抗の拠点、日教組、自治労に焦点がしぼられるであろう。いま日本の労働組合、労働者組織の中で、まがりなりにも、資本に抵抗し得る大きな組織は、日教組、自治労、私鉄以外にない。ここをつぶせば、労働組合の組織化が遅れている第三次産業の合理化はさして困難なことではない。

さし迫る一大攻撃に対応し、味方の戦線を整備するため、既に六十年代から、民間労働組合を破壊してきた「能力主義管理」について、しっかりと学習し、本質をみきわめる必要がある。その詳細については、既に「社会通信」六一七―六二四に報告しておいたが、ポイントは、次の如くである。

抑圧ではなく、労働者の創造性をひき出すことにより、生産性を向上させるといふ、行動科学に立脚する労務管理は、既に一九五五年、日本生産性本部設立時から、財界により研究されてきた。

これが実施に移されたのは、五七年、新日鉄・広畑工場であったが、六十年代、たちまち、日本の拠点産業、鉄、電機、造船、重化学工業、自動車の職場を蚕食した。アメリカでは、失敗したこの管理形態が、短期間にここまで進展した理由を東大東洋文化研究所長、中根千恵は、「日本の社会構造の基本形態をうまく適用したからだ」と説明している。しかし、それだけではない。労働運動史上からみれば、三池闘争を敗北と総括し、職場闘争から、政策転換闘争に方針を切りかえた、総評指導のアヤマリは大きい。池田内閣は、この転換に乗じ、資本の要求する能力を幼児からうえつけるため学習指導要領を改訂し、公教育に強制した。日教組が大量処分の犠牲を受けながら、闘った学力テスト反対闘争の意義は、いま改めて検討すべき問題である。

いづれにせよ、民間大企業職場は、この「能力主義管理」により、労働者の、横の連帯は破壊され、資本による縦系列に再編成された。その結果が六四年IMF・JICの成立、六三年同盟の成立となり、六七年以降の第一次右翼再編成の攻撃となる。

国民意識の保守化は、労働者の保守化から

七三年世界不況により、資本の利潤率は急速に低下し、中小企業はぞくぞく倒産する。職場の横の連帯を失った、労働者は、首切りをのがれるためには、職制に頼る以外にない。

マルクス経済学者は「不況、恐慌は資本主義の危機であり、この危機こそ、労働者が立ち上り、社会主義社会への道を切り開く好機である」と、説いてきた。しかし、労働者は立ち上らない。それどころか、資本にすぎり、職制にすぎり、仲間をけおとして生きる道を選んだ。労働者の保守化、階級意識の後退は急速に進んだ。

マルクス経済学がまちがっているのではない。経済学者に「労働者組織論」が欠落していたのである。レーニンの組織論が欠落していたのである。「労働者は自然発生性にまかせておけば、ブルジョア思想のとりこになる。階級意識は、学習と闘争、組織化以外には、生れないし、育たない」というレーニンの実践から生れた階級意識育成の教訓を経済学者は欠落させたのである。

いづれにせよ、この一九七三年が、日本人の意識構造の一大転換点であった。NHK調査をはじめ、各種調査は、七三年を頂点として、日本人の意識構造は、急激に保守化、非行動的、非社会的に変化してきたことを報告している。

いま、国民の意識変化を理由にして、労働者、労働組合の闘いの消滅を合理化することが一般である。これは、歴史的にも、理論的にも、アヤマリである。日本の全人口の八十％は労働者、その家族である。資本は彼等の意識を「能力主義管理」により保守化させることにより、日本人の意識構造を変化させたのである。資本はそのことにより増殖し、会社国家日本ができたのである。

そして、七十年代後半、ME技術は、この労働者管理組織、特にその中心をなす小集団活動を基礎に、急速に発展し「ジャパンアズNO1」といわれるまでになったことは、既に前記、「社会通信」で報告したとおりである。

能力給を許すな―自治労、日教組

いま、自治労、日教組中央執行部をはじめ、三十三単産幹部は「組織防衛のため」と称して、社会党を解散し、新党づくりに、うつつを抜かしている。敵が自らの生存をかけて、労働者の血の一滴をしほりとるまでの、一大攻撃をかけてきているとき、これに立ちむかう闘いを準備しないでなにが組織防衛なのであろうか。

敵の攻撃は、既に火ぶたを切られている。「能力主義管理体制」とは、能力給、小集団活動、下級職制の権限強化の三本柱である。

自治労、日教組には、能力給攻撃が既に十数年来かけてきているが、昨年から、いよいよ、全戦略体制にくみこまれ、国家権力あげての攻撃に移りつつある。自治労、日教組とも現在、年功賃金であり、敵の手に、賃金査定を許していない。これが一↓二↓三等級と上位等級への移行が、職制の査定テストによることになればどういうことになるのか。日教組は五段階賃金に対して、死力をつくして闘うなかで、組織をやっと存続させてきた。自治労も差別賃金反対が、組織防衛拡大の生命線であった。いまこそ、全戦線を整備し、この一大攻撃をはねかえし、反撃に移るときである。

このたたかいは、日本の総資本、国家権力が自らの存否をかけた攻撃であるだけに自治労、日教組を先頭にしての全労働者の団結、反撃が必要である。連合中央がいま、財界の走狗とな

り、産業構造転換をすすめる、社会党が解党し、ブルジョア政党に走ろうとしているとき、我々は下からのたたかいを強化し全労働者の横断的連携、共闘を拡大することからはじめなければならぬ。同時に、産業構造転換と対決する政党、政治組織を結成することが急務である。

久保新党の階級的性格をハッキリさせよう

基本路線は、明白であるにもかかわらず、まだ心ある活動家、社会党員が迷っているのは、連合の中央指導部、社会党中央指導部に対する依存の習慣を脱却できないからである。しかし、沖繩の闘争をみよ。少女暴行事件を契機に爆発した沖繩闘争は、地位協定から安保破棄へとすすみ、その抑圧機構と化した前村山政権、橋本政権との対決は明確になっている。私の長年の友人である、元沖繩高教組委員長、ギボ氏は、元鹿児島高教組委員長・久保亘、現社会党書記長とも、昔共に闘った人物であるが、いま安保、自衛隊容認し、階級闘争と鋭く対立する日本社会党中央との対決を明確にしている。

社会党中央指導部の指向する、新党の階級的性格は、いまや明白になったといつて良い。沖繩闘争の障害と化した久保社会党が、ブルジョア政党の一部と合体してつくる新党は、いかなる階級をその物的基盤とするのか。連合中央指導部、これを支える大企業連指導部は、会社、財界の方針の忠実な履行者ではないのか。彼等は財界の走狗となり、結成以来六年、共にME合理化をすすめてきたのは、天下衆知の事実である。

この連合が、八九年成立のとき、これを歓迎し、支援し、安保、自衛隊を容認してきた社会党中央指導部が、いま、さきがけと手を結び、新党をつくろうとしている。この新党の階級的性格は、あまりにも明白ではないのか。

連合は、少なくとも構成員が労働者であるだけにその階級的性格をかくして、労働者弾圧をすすめてきた。しかし、「新党」はその階級的性格をかくすことはできない。日本産業構造転換の賛否を言われるとき、賛成するどころか、その推進の一役を荷い、全日本の労働者勤労国民に敵対することは明らかであろう。

アメリカ、フランスの労働者は立ち上っている

この一大危機に当り、我々は幹部依存の悪習を捨て去り、労働者、横の団結を回復したたかう以外道はない。そのことは不可能なことだろうか。そんなことはない。昨年、十二月シラク政権と対決し長期不拔の闘争をたたかったフランス労働者のゼネストは、はじめは幹部指導によるものではない。年金・福祉切り捨てに怒る職場労働者のたたかい、その結果が、幹部をつき上げ、巨大な闘争に発展したのだ。

ヨーロッパ、アメリカの労働者が、レガノミックス、サッチャリズム等、新保守主義の凄じい弾圧に抗して闘いの火を消さないのは、横断的組織によるものだが、それも幹部指導というよりは、職場労働者のたたかいが、幹部をつき上げ、大闘争に発展する例が最近ふえている。

アメリカでは、千三百万人余りを組織する最大の労働組合、AFL・CIO会長、ドナヒューは、十月二十五日、九五年大会で、ジョン・スウィニーに敗れた。AFL・CIO

結成以来のできごとである。新スウイニー会長に、最近暴力的になってきた組合つぶし、スト破りと、正面から対決して闘うことを明白にして勝利している。資本の走狗と化したアメリカ労働組合幹部交替を転機として、アメリカ労働組合は再生の道を辿るであろう。我々もそろそろ腐った中央幹部に、自らの生活と権利をゆだねることはやめて自分の力で、職場の労働者の仲間の力で、そして、それを横につないで、たたかってみようではないか。

私は、電産、産別、日教組、総評と五十年たたかってきたが、闘争を邪魔するものは、常に組合指導部であった。これとたたかって指導部を再建した。しかし、指導部を握れば、敵は柔かく対応する。日常つき合う相手は、マスコミ、部長、局長となる。常に自戒し、職場を歩き、共に職場闘争をたたかわねば、必ずといって良いほどだらくする。指導部とは墮落するものという原則をもって、職場を強くし、指導部の尻を叩かねば組合は、労働者のものとならない。どうしても資本、権力の走狗となり、説得し難い指導部は、打倒し、仲間と執部を握らねばならない。矛盾は限界に達している。アメリカや、フランスの労働者がやってきたことやっていることを、日本の労働者がやれないことはない。

一九九六年を日本労働運動再生の転機に

いま、我々は、四十代の大学教授、助教授、証券会社研究所員、労働組合の活動家が集まり、月一回基本的研究会をもっている。A研究所、D氏は「いま、日本の経営者はおしなべて、自信を失っている、不況脱出の方向を見出し得ない」と具体例をあげて報告。神奈川県評オルグを数十年やってきたK氏は、民間職場職制の自信喪失を報告した。

私の旧制高校、大学の同級生には、日本財界の首脳となっている者が、五、六人いる。先日、久しぶりのクラス会で、彼等に会うと、「お前がいつてるような、日本財界が、はつきりしたみとおしをもって、戦略をたてる時代はあった。いま、各企業が、自分の会社の生きのこりをかけて、必死でやっている。とても、人権のことなど、かまっちゃいられないんだ」といつていた。

資本主義とは、まことに奇妙なものである。その運動は常に矛盾を産み、その再編強化のために、新しい労働者支配体制をつくり出す。いま日本の資本は、凄じいME合理化により成功したが、その結果バブルを産み出し、利潤率を低下させ、不況脱出の道を見出し得ない。深刻な自信喪失に落ち入りながらも、必死で動いている。

矛盾、労働者支配の再編成、この機をのがさず、我々が労働者、職場の仲間をつかまえるのである。配転、合理化、労働組織の編成替え、このとき、必ず生ずる矛盾は、労働者の不平、不満となる。これをどう怒りに変え、行動に転化させるかである。

戦後、最大の不況、一大転換点に当り、全労働者、勤労国民が血の一滴まで吸いとられようとしている。この客観的には有利な条件をどう具体的に生かし、職場に、地域に労働者をつかまえるかである。研究し、討論し、たたかい一九九六年は日本労働運動再生の転期としよう。

(坂牛哲郎)

まず自己変革にとりくむ

——何が問われているのか——

中曽根の主唱した戦後政治の総決算が、かなりの程度進んだ現在、社会党は九六年一月十九日の解党にむけてひた走っているという中で、社会党の運動に参加した一人ひとり、今、なぜこうなってしまったのだろうかと考えをめぐらしていることだろう。

そして、その整理の仕方いかんでは、今後の方向が全く違ってくる。ある人は、リベラル新党に進むべきだと言い、護憲の社会党再建に進むのは間違った左翼小児病だと言う。

逆の立場からは、相手側を転向と断じている。この中間にあつて両者をとり持つような立場があると考えるのは幻想にすぎない。全国の一人ひとりにこの踏み絵が迫られているのである。

結局のところ、我々は孤立化させられたのだが、このことは、大衆運動をめざしてきた我々にとって、その目的が現在のところ達せられなかったことを承認するという、苦い判断である。もちろん、個々の活動のエリアの奮闘があり、それだからこそ、このような包囲の中で、この小さな戦線を維持できてはいるのだが、全体を見わたしてみると、点として残ったにすぎず、その点も、あちこちでつぶされつつあるわけで、早急な立て直しの必要に迫られているのが、現時点だと思う。

指導部の自信喪失

なぜ孤立化したのかを考える時、同時に、孤立化させられたことも合わせて考えてみなければ、全体の仕組みは見えて来ないだろう。孤立化の原因を三つに分けて考えてみよう。一つは、総評労働組合幹部の自信喪失の原因としてのスト権ストライキである。あのスト権ストの敗北を契機に総評の限界を感じさせ、全民労協の発足から連合へとつき進んだ流れを現時点から見れば、あのストライキは資本に利用されたと言うことができる。

当時、我々は青年で、とてもあのストライキにこめられた労資の思惑までは考察に及ばなかったが、何かしら疑念として残ったのは全電通の右傾化との相似である。たたかう全電通は、ストライキ、処分、兵糧攻めの過程で組織温存優先の判断から、あざやかな右転回をはたした。組織を守るにはカウンターパンチしかないのではなく、ジャブやフックでもじわじわと効き目を示すのだということを知っていれば、もっと違った戦術行使もあり得たであろう。資本の挑発に乗って、勇ましい闘争宣言を發し、ポロポロになって、路線転換をしたのでは、組合員は守れない。

しかし、勇ましい戦術が提起された時、それが本当に今、行使すべき戦術かどうか再考を促すような態度は、取りにくいものである。この時、たたかいには、相手があることを教え、敵の目標を分析し、場合によっては、引く態度もあることを言える者とならなければ、我々は再び、現時点で持てる勢力すらも失いかねない。労働組合幹部の自信喪失は、敵の分析不足による自業自得であったとも言えるだろう。

しかし、この労働組合幹部の判断の誤りは、誤まれる情勢分析にあるということは、それを提供する人々の問題でもあった。

我々は今や、正しい情勢分析を与えてくれるところを失っているのであるから、自分で

それを試みる外ない。自分一人の分析では心もとないから、それをさらけ出して、他人の批判によって直して、より正しい分析としてゆくしかない。

そのためには、どんなポジションにしようと、自分で考えた情勢分析を発表し、交流し、場合によっては、討論による激突は避けられないかもしれないが、同志的に学び合う態度を持って、ことに当る外ない。

職場の包囲網

二つ目は、職場の包囲網である。結局、これに我々は勝っていない。むしろ活動家である自己を、この包囲の中で維持することに、窮々としている。

職場を戦場とする活動家と資本の攻めぎ合いは、つまるところ、仕事をめぐる物の見方をめぐるたたかいである。

「人は増やさない、仕事は増やす」となった時、それならどうなっても知らないよと聞き直れるかどうかだ。

この開き直りが欠如しているために、「仕事を減らせ」とか「人を増やせ」と要求してみても、かち取れなかったら仕方なく、自分で処理するとか、労働条件の悪い労働者への委託外注化などがひきおこされている。同じ仕事で「半額」でできるなら、資本は喜んで下請外注化を選択する。そして、「高い」本工は邪魔となつて切り捨てられる。

このような先のことが見えているなら、労働者はみすみす自分の不利益となる選択は行わないように思える。しかし、現実には、そうではなく、むしろ、現在のきつい労働条件から、自分が解放されるためなら、あえて、外部下請労働者が導入されることを歓迎する労働者が大半である。

現在の職場労働者は、労働力という商品の販売者ではなく、俸給者として会社につながれている存在に落とされられている。

労働者の個としての確立がない。どうしてこうなったのかについては、三つの要因が考えられる。

教育 一つは、受験戦争に代表される弱肉強食の学校教育現場である。画一化された詰め込みの押し寿司が、毎年でき上つてゆく。教師も生徒の成長を楽しむ余裕を奪われ、反抗する生徒には暴力的統制をもつて秩序の維持に当るしかなくなっており、校内で待ちかまえて、巻き尺で、地面からズボンのすそ先までの距離を測つて、校則と照らし合わせている。このかがみこむ教師の背中を生徒達は、上から見下し、馬鹿にしている。

家庭 二つ目は、家庭である。受験教育を肯定し、教師達を包囲しているのは親である。つまり、その大半は労働者である。彼らは自分の境遇の不幸を総括し、せめて子供には、しがなない労働者になつてもらいたくはないと、知識を詰め込む技術の修得をすすめる。公的學校が規制するなら私塾に代替えしても、受験教育戦争の兵隊として、子供を養成することに専心する。

その結果、子供の自由な発達は阻止され、はんで押したような人間と、社会不適応を刻印された個性豊かな脱落者とがうみ出されてゆく。そして、その豊かな個性は、この社会にとつては負の遺産として処遇される。彼らの一部は、学校で教えられたとおり、金を持たないホームレスをさげすみ、自分への攻撃を自分より弱い者への攻撃に転化して、殺してしまう。おそらく、大して罪の意識はなく、「人並みになれない者の存在はない」とい

う歌の文句が少年達の頭をかけめぐっているのではないだろうか。

最近のパソコンは中高年者が買ってゆくと言う。親達は、自由にパソコンをあやつる新しいジェネレーションの出現の中で遅れを取り、会社に入った機種と同じものを買ってひそかに練習しているのだと聞く。パソコンも使えない者は、もはや会社にいられない。

そして、自分を職場からしめ出そうとする若者の世代は、他ならぬこの親の世代が作り出した人間なのである。

職場 三つ目は、職場での教育である。最近JR車内のわすれ物を届出に駅に行ったところ、思いがけず、事務室の中に入れてもらった。

そこで見たものは、「全員参加のセールス」というポスター。V7作戦と書いた目標と実績を示す掲示物。そこには、出雲方面と黒部方面の二ヶ所の旅行について、目標を上まわる実績が記入してあった。そして奥まったところには、個人別提案件数のグラフが貼ってあり、管理職の席近くのロッカーには「今日は声出しの日です」と、毎日かけかえる目標がぶらさげてあった。不意の来客にも十分応待できないほど、その管理職も何やら机に向かつてとり組んでいるし、中年の労働者が忘れ物の問い合わせで東京駅とやり取りする電話にかかりつきりになっている中、次から次へとかかってくる電話にどう答えてよいのやら、新参の労働者は、目がウロウロしている。しかし、年配の二人は、自分の仕事にかかりつきりで、孤立している。

国労をつぶすために一〇四七名の首を切った会社は、こんな職場をつくり出していた。

よその職場を見れば、自分の職場がこの先どのようなふうになっているのかが見えてくる。しかし、その職場で、じわじわと進行しや合理化は、慣らされてしまつてなかなか見えにくいものだ。

今や「カローシ」とともに外国語にもなっている「カイゼン」の積み重ねが、このような殺伐とした職場をつくり出している。

そして、会社のもうけのためにまい進する労働者は、学校でのイデオロギー的基礎の上に、職場で、その毎日のやりとりの中で作られているのである。時々研修によって体系的なイデオロギーを詰めこみ、もう、会社人間でなければ人間にあらずというところまで、自然の造物としての人間をつくり変えてしまつている。

これは一つの極限の姿のようにも見える。自然の人間は、労働者として、この押し着せに必ずつどこかであらおうとするものだ。我々のつけ入るスキ間がなさそうに見えるところが、かえって間隙として空いている。

昨今は、宗教が、ここにつけこんだ。宗教につけ込むことができ、我々ができないところに、孤立化の三番目の原因を見出すことができる。

われわれは旧くさくわっていないか

孤立化の三つ目の原因は、我々が諸科学の発展を取り込み、古典を発展的に継承して現代に生かそうとしなかったことに尽きる。

古典のみを読んでは、現代が解釈できるといふのは間違いだ。また、そうだからと言って、古典を素通りしたのでは、週刊誌の俗物記者になってしまう。古典の中の生かすべきところを現代につなげる作業が欠けていたのである。

逆に運動が狭くなってきた焦りから、古典の中の真髓たる部分を捨て、俗流解釈へと転

落することがママおこった。しかし、俗流におもねれば運動が拡がるというのも幻想だ。基準が違うことを盛り合わせて見れば、混乱するばかりだ。やがて、俗流の基準に一切を合わせなければ統一が取れなくなる。

むつかしい説明をするから大衆がついて来ないと言うのは大変な思い違いだ。

大衆を馬鹿にしたところからは、決して大衆闘争は生まれえない。共産党が大衆運動をつくり切れないのは、その前衛意識がわざわいしているとも言える。大衆を馬鹿にする連中は、結局、大衆から馬鹿にされて、大きな歴史的仕事をなし得ない。

やや抽象的に書いてしまったが、九五年に我々の内部で発生した混乱を指している。

たとえば、国際貢献に対する態度、国連をインターナショナルと勘違いしている態度、支那能力論への傾斜、「一所懸命に働いても、生活が苦しいので賃上げを要求する」という態度、「合理的権利闘争」という発想、経営分析で生き残れるという幻想、規制緩和のつまみ喰い、「これからは機構改革は合理化とは考えない」という大胆な思考転換、地方行革と切り離して地方分権があり得ると思っているとんでもない思い違い。

数えあげればキリのない、これらの大混乱が九四年から一斉に吹き荒れた。丁度、社会主義の崩壊から五年。この五年間というもの我々の全体が古典から遠ざかり、ブルジョアマスコミの毎日の教育を受ける中で、大混乱の花ざかりとなった。

古典を正しく現代に引きつぐ任務を誰も引き受けなかった。その任務の中には書き換えも含む以上、易々とは受諾しかねることだが、誰かが、みんなの批判を受ける最初のタタキ台をつくらないことには先に進まない。

我々は、この二〇年来の孤立化から脱却するため、職場を見直し、家庭を見直し、そして古い説教になりかかっている古典を引きつぐべく、新しいイデオロギーづくりに向けてふみ出さなければならぬと考える。

マスコミのマインド・コントロール

最後に、マスコミが反動化している。このことは、農民に依存できない階級構成の必然の産物なのだ。労働者に保守が依存するためには、常に政治教育が欠かせない。

ブルボン王朝を倒した農民は、革命が小地片を与えたとたん、反動化した。今や、その農民は依拠するに足りない少数となってしまった。労働者は、放っておけば、労働者的な物の見方になってしまう。マスコミによる労働者のマインド・コントロールは、今のところ成功している。

しかし、これからは保障の限りではない。消費税がとり上げられ、福祉は切り捨てられてゆく。ゼネコンのための事業にますます税はつきこまれ、先取りされた増税たる国債はふくれあがっている。日本の住宅政策の目標が年収の五倍の住宅費であるなら、おそらく年収の四倍近くのローンを組まされての生活になっている。今、国の借金は年収の四倍、そして高率のローンを払っていることを考えてみれば、来たるべき時は近いことを感じざるを得ない。この時、税率アップに抵抗する要があれば、事態は急転回しよう。

大衆を馬鹿にした前衛では、大衆は呼びかけに乗れないのである。

未来は無理矢理、明るく見るべきものではない。それは必然として胸のうちにしまっておけば良いではないか。我々はまず、自己変革に取り組もう。

(赤穂 播)

やった！「日刊乗務」七千号達成

——七六年の創刊以来、たたかいたの武器に——

京成労組、乗務分会職場機関誌「日刊乗務」は、一九七六年二月一日創刊され、一九六六年一月二十九日、七〇〇〇号を迎える。

資本のデマ宣伝に惑わされない為に組織の団結強化目指し、今日まで一回も欠かすことなく発行された。

「合理化」提案が契機

分会員六六五名で、発行部数は四一〇部、そのうち職場に三〇〇部、残りは、他支部・分会・他私鉄交流単組に送っています。

一九七六年、六月二十八日、電車部門に二六九名の合理化提案がありました。これを阻止する為に、私達は固く意志統一する必要がありました。

しかし私達、電車乗務員の勤務は、変則勤務（交代勤務のうえに、乗務しているとすれ違いが多い）なので、皆んなに伝えるには、四、六日かかるという職場実態でした。

そこで、毎日正確にわかり易く伝える為には……ということから「日刊乗務」の発行となったわけです。

会社の攻撃を前にして、どうしても日刊紙発行をやりきらなければならなかったのです。その「日刊乗務」は、七つの組が週一回づつ担当することにより、日刊紙が成り立っています。

その各組は、運転士、車掌、約八〇名から、公休や泊り、午後、午前番など同じ様な勤務状態をもっています。

そして冠婚葬祭や旅行、スポーツ等、独自に組費として財源を確保した、グループになっています。

運転士、車掌、組合せは、他私鉄と違い、全線一区であり、嫁さんより長く組んでいる仲間もいる。

「日刊乗務」を支えているのは、職場活動家であり、党员でもある。

もちろん、職場の仲間と、泥んこになり、酒を飲み、世話役活動、学習闘争、労働条件改善の闘いを一歩前で進めていかなければなりません。「日刊紙」活動を通しての仲間作り、活動家を生み出していく事は、職場の闘いと合わせて進めてきた事でもあります。

「日刊乗務」を作りつづけてきた中での成果は――

- ① 情報が早く入ってくるので変なデマがなくなり、憶測で話すことがなくなりました。
- ② 日刊紙活動が組織活動として取りくまれ、多くの人が参加している。
- ③ 変則勤務なので意志統一がむずかしい職場実態だが、共通の認識を広範にもてるようになった。
- ④ 会社がやたらなことを言ったり、したりすることができなくなりました。
- ⑤ 記事を書く側も、ものごとを早くつかめ、先送りせず、まとめる力がついてきた。
- ⑥ 他の職場も日刊乗務に刺激され、日刊化が増えた。

ワイワイガヤガヤの論議の中で

今では、会社は「日刊乗務」を手に入れ、コピーをし、一生けん命読んでいる。職場の不満・疑問を先取りして回答する時もある。

さて、新聞作りの日の勤務は、早朝六時から乗務し、一四時頃に乗り終る。

その後、分会室に仲間が集まる。今日一日あった事を皆んなでワイワイガヤガヤ論議する。近くに甘太郎焼の店があり、そこで買ってくる、飲み物、お菓子。細長い分会室は十人も入ればいっぱいである。立って仲間と論議している人、原稿を書く人、実に活気がある。記事は、その日の出来事（事故についての安全教育の指摘、日常の労務管理、組合行事、分会行事）働く者の立場で、書かれていく。

一七時頃に書き終る。歩いて三分の所の電車支部に印刷に行く。

十数名の人が、支部に入る。印刷する人、B5版の両面なので裁断する人、各控室毎に振り分け、ヒモをつけて配布する人、アウンの呼吸で、作業がスムーズに回っていく。

その日の内に、記事が全体のものになってゆく。

一七時頃終ると、ちょうど居酒屋に灯がつく頃。皆んなで、近くの赤ちようちんで一杯やる。

仲間の話、会社の話、家族の話に花が咲く。帰路につくのは一九時頃になる。有意義な一日が終る。こういうシナリオで、毎日毎日仲間が集り、論議し、酒をのみ、発行続けてきた。職場一人ひとりのものになっている新聞です。

京成は、七七春闘で二二〇〇名の首切り合理化をかけられた。焦点は赤字攻撃であった。会社は働く者にやさしい言い方で、赤字論をせめてきた。牛一頭論というもので、親牛（京成という会社）が、やせ細っている。それなのに子牛（労働者）が群がって乳を吸わせると言っている。これでは親牛は死んでしまうという言い方で……

これに対し、働く者の反論は「昔は単コロ（一両）で走っていた。今は六両、八両になった。我々が働いてきたからだ。労働力が加わらなければ、タダのクズ鉄じゃないか、我々の生活の赤字の方が先決だ。働く者に責任はない」……と。

七七春闘は、六人に一人の首切り提案を、一五六時間、第四波まで闘いを進め、最小限で妥協をした。

この闘いでも、日刊紙は連日、仲間との討論、会社への反論を進めた。七六年に創刊されてなかったならと今思うと、ゾウーとする。

「通信」とともに一万号めざす

今、企業の門前で、民主主義はなくなると言われる程、合理化の波は押し寄せている。N T Tの五万人合理化、国鉄分割民営化以降の安全軽視等、働く者の権利、民主主義が、企業サイドで進められている。

かつての三池闘争で、「人間らしく扱え」という闘いを、今こそ職場を越えて進めていく時だと思えます。

期せずして、貴誌、社会通信も二〇年、私達「日刊乗務」も二〇年目を迎えます。

社会通信のこれまでの努力と友人を迎えた事に敬意を表すると共に、私達も、七〇〇〇号を機にシコシコと発行し続けて行きたい。共に頑張りましょう!!（京成労組・大嶋甲三）

◇ 読者からのおたより ◇

拡大に努力中 藤沢でも護憲の社会党再建のため準備を進めています。一月の渚滑会総会（国労の北海道からの広域異動者の地域の集い）を楽しみにしています。鋭い問題提起よろしく！「通信」の拡大にも努めています。

（藤沢・A）

編集部より 私も楽しみ。「通信」拡大ぜひぜひよろしく。

「通信」送って 継続について半年分送金します。ひきつづきよろしく。

（福島・K）

私たちががんばる 日頃「社会通信」充実にがんばられていることに敬意。二部減になっ
てしまいました。元の一部数にもどすよう努力中。今後ともよろしく。

（埼玉・Y）

編集部より ご多忙な中での取り扱いに感謝。ぜひ仲間をふやして下さい。

理論的混迷 最近の左派の後退、それを理論的に粉飾する腐敗ぶりには、ワイマール共和

国下でヒトラー抬頭を阻止しえなかつた、社会民主党を想起させられます。（東京・U）

編集部より 住専、団体への破防法適用、沖縄県知事を被告とする日米地位協定、そし

て新防衛大綱、今年消費税そして住専問題。おっしゃるとおりです。

資本主義には負けられない 三人分の誌代です。資本主義に負けるわけにはいきません。

（千葉・C）

自分のため、仲間のため、子どもたちのために。

自分自身の生き方の問題 社会党の新政問題とは、党員一人ひとりにとっては詰まるところ、自分自身の生き方の問題だと思ふ。平和と民主主義を大切に、一人の人間でも大切

にする社会を創り上げることを素直に生かせると思う政党を選べば良いだけの話である。私にとってはそれは今のところ再建社会党の道かなと思ふのである。社会党を解党して、

訳のわからない新党をつくろうとしている党中央や連合の一部組合幹部など私は人として評価できない。不誠実であり、官僚的であり、利己主義であり、非民主的である。そういう

連中が中心となつてつくろうとしている新党など国民が支持する訳もないし、うたかたの夢である。だから私は新党に行く気などまったくくない。

（千葉・鴨哲登志）

「もんじゅ」はいらない 「もんじゅ」の四重の危険性。一、今までの原発とちがい暴走しやすく、核爆発の恐れがある。二、冷却材として水に触れると爆発するナトリウムを一七〇〇トンも使っている。三、超猛毒のプルトニウムを一・四トンも使っている。四、「もんじゅ」がある敦賀半島の近くには地震の巣である活断層が走っている。

世界の高速増殖炉の運命。アメリカ PRISM 炉計画 一九九四年、予算打ち切りにより終止符。ドイツ SNR-300 炉 運転直前の度重なるナトリウム火災事故と炉心崩壊事故の可能性を否定できず、運転に入ることなく中止。イギリス PFR 炉 一九八七年、伝熱管大規模破断事故を起こし、九三／四閉鎖。フランス 実証炉スーパーフェニックス 一九八七年からナトリウム取り扱いに関する事故を連発し、単なる「研究炉」に格下げ。欧州共同開発の実証炉 EFR 計画、立ち消え。

「もんじゅ」と命名の由来 どう猛な獅子を飼ひ慣らす文殊菩薩（もんじゅぼさつ）にあやかるうとした。

進路は決まった 昨日、茨城でも県委員会が開催されました。「党外の人」の意見は取り入れるが、長年党を支えた「古い黨員」には「党名変更は止めてほしい。せめて名前はみ

んなどで相談して決めてほしい」の声も取り入れない党に成り下がった。党の歴史を無にする党大会を前にして「党」はすでに失われています。我々の進む道も決定された「県委員会」との思いです。
(茨城・I)

【新社会党】加入者は増大 一月二二日に党員協企画会議があり、原野人氏に提起を受けて一人ひとりの率直な気持ちを出し合い討論致しました。国労の現在かかえている状況などから「党関係でつくり上げてきたもの」が切れてしまうのではないかと、又、党員協としての立場もあり、新社会へと今は言いきれないが、新社会に入って運動をつくることしかないことも事実である」などの発言の他に「一日新社会党にはすでにみきりをつけている」新社会に入るとの発言が大勢でありました。私たちは党員協内での仲間との話を、これから始めることとなります。自分たちがつくる党組織、活動にたずさわる気持ちを充分に高める大切な時期になることと思います。私は迫力をもってボチボチ歩みたい。(国労・K)

◇ 編集部だより ◇

◇最近、川柳にこっています。日本生命—テレビ等の宣伝に吉永小百合が出ているのは気に入るのです。私と同世代の人ですから。その日本生命がサラリーマン川柳で名を上げたからでしょうか、川柳の出版ブーム。約二十冊ほど仕入れました。

▽労働運動、社会党いや違った社会民主党でしたっけ。いやまあ、労働運動、政治に非難の強いこと。これが庶民の声なんですよ。大変革の日も近い！ がんばろうよ。

▽いつものお願い。読者ふやして、紹介して下さい。見本誌送ります。よろしく！

「新社会党」結党大会のご案内

新社会党（矢田部 理代表）は三月三日、結党大会を開く。場所、日時は左記のとおり。旧社会党に想いを寄せる仲間、社民党にはついていけないと云う仲間、新社会党について考えてみたいという仲間。ぜひ友人、知人、家族を誘いご参加を！

日 時 三月三日（日）、午後一時より
場 所 日本青年館（JR千駄ヶ谷駅下車）

※ 詳細は次号で案内します。

お問い合わせは「新社会党」電話〇三—三五五—三九八〇まで